

「最後の一葉」と「賢者の贈り物」

落ち葉の季節からクリスマスのシーズンへ。この時期に思い出されるのはアメリカ人の短編作家O・ヘンリーの小説です。「最後の一葉」と「賢者の贈り物」——この二つは氏の多くの短編の中で、日本で最も読まれている作品でしょう。日本語訳は中学校の教材としても使われています。

私の作品との出会いは、高校時代の英語の教科書でした。短編であること、内容がわかり易く教訓的な面もあること、使用されている英語も比較的易しいこと、などから教材として最適だったのでしょうか。どこかで一度読んだか聞いた方も多いのではないでしょうか。まずは「最後の一葉」(The Last Leaf)の要約です。

——芸術家を目指す人々の集まるワシントンのある一角。ジョンジーは街で出会ったスーと共に、アパートに小さなアトリエを持っていた。彼女は肺炎に犯されていた。

「彼女を生かすのは、治療よりも、むしろ生きようとする意志なのだ」と医師が言う。しかし、ジョンジーは窓の外にある木を見ながら、自分の死期ばかりを考えていた。

「あの木の最後の一葉が落ちたとき、自分は死ぬのだ」。スーは彼女のそんな姿を見て、どうしたらいいか困り果てていた。

アパートには、もう一人、偏屈な老人が住んでいた。

「いつか自分の傑作を作る」——それが口癖だった。そして、その夢をかなえることのないまま老人になってしまった。スーはジョンジーが肺炎で生きる希望を失っていることを老人に告げた。



冬を迎え、木からは一枚また一枚と葉が落ちていった。やがて、嵐が訪れた。嵐が過ぎた翌朝、ジョンジーは窓を開けた。木には、最後の一葉だけが落ちずに残っていた。激しい嵐の中でも落ちなかった葉っぱを見て、彼女は再び生きる希望を持った。やがて、肺炎からも回復した。

同じころ、同じアパートのあの老人が肺炎で亡くなった。なんでも、あの嵐のなか、玄関にびしょ濡れでいたらしい。そう、最後の一葉は、煉瓦に描かれた一枚の絵だった。それは、老人の描いた最初で最後の傑作だったのだ。

この短編で、作者は何を訴えようとしたのでしょうか。「自分の命と引き換えに若い命を救った」「本物の芸術のために自分の命をかけた」など、いろいろと解釈されるでしょうが、私は文中の医師の言葉に注意を引かれます。

——医者と言った。「わしの努力が及ぶ限り、あらゆる療法を施してみよう。しかしな、あの娘が自分の葬式の列での車の数を数え始めたら、医薬の効能がふつうの5割ぐらいになると思ってもらいたい。あんたが彼女に、外套の袖のこの冬のニュースタイルについての質問をさせることができれば、十の一つだった可能性が五の一つになると約束しよう」

相手は若い女の子です。美しさへのあこがれやファッションについての関心は当然あるでしょう。そこに医師は目を配った。ジョンジーとスーに「生きる希望」と前向きな人生を提唱する医師の言葉には十分に納得できる力がありますね。

10月「赤毛のアンをもう一度」でご紹介したアンのように、すべてを前向きに明るくとらえていく心こそが、病を治し、人生を開いていくカギだと示唆していると思うのです。

続いて「賢者の贈り物」(The Gift of the Magi)です。

——貧しい夫婦がおりました。明日はクリスマス。妻のデラはつぶやきます。

「たった1ドル87セント」。これは彼女が毎日必死にためてきたお金のすべてでした。

「これじゃあ、大切な夫のジムに何かよいものを買ってあげたくてもどうしようもないわ」

でも、彼女には一つだけ宝ものがありました。それは誰もがうらやむ長くて美しい栗色の髪でした。

「そうだわ、これを売れば・・・」

髪は、20ドルで売れ、これで21ドル87セントになりました。

一方、ジムにも大切にしている宝物の金時計がありました。でも革紐がぼろぼろになっていた。「あの金時計に合う上品な鎖がいいわ。」デラは多くの店を見て回り、髪を売ったお金でプラチナの鎖を買い求めたのです。

仕事から帰ってきたジムはデラの髪を見てたいそう驚いて力を落としました。それはデラが想像していなかったとても謎めいた悲しそうな表情でした。

「あなた、私の髪がなくなったら私への愛情もなくなっちゃうの？」

ようやく口を開いたジムは言います。

「そんなことで君に愛想をつかすような僕じゃないさ。ただ・・・この包みを開ければわかるよ」。渡された包みの紐を解き、やがて泣き出すデラ。そこには、かつて彼女が憧れていた横髪用とうしろまげ用のくしのセットが並んでいました。もう無くなってしまったあの髪にとってもよく似合う色の・・・。ひと泣きして気を取り直したデラは言います。

「私の髪ってすぐ伸びるのよ、それより私あなたの時計の鎖を買ったの。さあ付けてあげますから出してみて」。

うなずく代わりにソファにどっと座り込むジム。

「プレゼントは片付けようよ。お互い、今すぐ使うにはもったいなさすぎるよ。実は、くしを買うお金を作るために時計を売っちゃったんだよ」

「さあ、夕食にしよう。肉を温めておくれ」

クリスマスの当日。二人がプレゼントしあったものは、結果的にお互いにとって役に立たないものとなってしまった。物語の結末で、この一見愚かな行き違いは、最も賢明な行為であったとされています。どんな贈り物をする人々よりも、この二人こそ最も賢明なカップル・「賢者」であることを伝えているのです。

短い物語に込められた強く深いメッセージ。私の信奉する日蓮大聖人の弟子へのお手紙の中でも次のように言っています。

「蔵の財（たから）よりも身の財すぐれたり。身の財より心の財第一なり」

財産や高価な物より健康な身体が大切。そして身体よりも心の宝こそが第一、との意味です。やはり、人の心を打つのは人の心なのです。

